

になつた人々も澤山ありましてね。黙語や不折の影響で、ホトトギスは文藝雑誌であつて繪畫に重きを置く雑誌といふので好意的に寄せられた人もあつたり又投稿家もありました。小川芋錢、石井柏亭、渡邊與平……。月村もあつた、それから川端龍子、齋藤與里、三上知治、森田恒友、そんな人々が盛んに畫稿を送つてくれましたね、ホトトギスは一時繪畫の雑誌か何か分らぬ位でした。

前の黙語、爲山、不折等の脈をひいて自然さうなつたですね。

渡邊與平が生きてゐたら偉くなつてゐたでせう、與平は夭折しましたがね。

橋口五葉といふのもありましたが、五葉の畫は漱石の紹介で載せたです。五葉も死にました。

「めざまし草」といふのを森鷗外がやつてゐましたが、其めざまし草に裏繪がありました。ホトトギスはめざまし草の眞似といふわけではありませんが、裏繪があつたといふことはめざまし草が先輩であります。其めざまし草は日露戦争を境になくなりました。

それから小説なんか盛んにやるやうになつて俳句に遠のいて挿畫なんか中絶したこともあつ

たが然し裏畫はつゞけてゐました。それから又思ひ立つて挿畫を載せるやうになつた。芋錢、百穂、柏亭、龍子、津田青楓、又、牛田鶏村なども載せました。山口八九子もありました。

百穂は私が國民新聞の文學部を擔當した時分に同社の關係から心易くなつたのです。俳句も一二句位ありませう。

不折も一句か二句か。もつとあつたかもしれませんが。

私の中學校時分の畫、残つてゐませんね。畫や字はもとからまづかつた。畫も寫生ならひよつとしたらうまかつたかもしれぬがその時分は手本によつて描かされたから。

(昭和十年十一月)

寫生文の影響

小學生の文章は此頃總て寫生文式になつたでせう、あれはホトトギスの影響といつていゝと思ひます。その點は大きい口を利いてもいゝと思ふ。芳賀矢一なんか確かにそれを採用した功

勞者だらうと思ふ。ホトトギスの忠實な讀者でした。私等の文章をはじめて教科書に採用したのは芳賀矢一です。

(昭和十年十一月)

田岡嶺雲

田岡嶺雲の死んだのは、私が修善寺へ行つてゐる時分、私は新井にゐたのだが、嶺雲は淺羽にゐて足が立たなくなつて寝てゐてそのとき逢ひましたかね、それが死ぬる二三年前でしたから大正四五年でしたかね。

182

(昭和十年十一月)

たとへばブラジル・臺灣の句

鈴木醉樓といふ人が手紙を寄越しましたがね、ブラジルの四季を左の如く區別してあります。

八月——九月——十月——春季。

十一月——十二月——一月——二月——夏季。

三月——四月——五月——秋季。

六月——七月——冬季。

若葉とか何とか天然の現象を詠つたのならばそれが何月にならうが若葉の感じに變りはない。唯一月とか二月とかいふ言葉を使つたのでは内地と反對になる。

素より俳句は東洋の詩といふより日本の詩だね、日本がひろまれば自然ひろまる。

臺灣で句を作る人は多少の不便はあるけれども、其臺灣の時候について本當に感じた句を作ればいゝ。こちらでも大概は分る。分るまいかといふやうな懸念は除けて安心して、内地人の模倣をしないで、本當の感じを作つて居れば大概わかる。さういふ句は先づ見逃がさないといふことを言つて置く。

183

内地が頭にあるからそれが却つていけない。内地の眞似をしたのでは生きては作れない。内地人に分らないといけないといふやうな考をよして、忠實に臺灣の句ブラジルの句を作つて貰ひたい。

忠實に寫生をすれば必ず我々にもそのよさが判る。偽りなしに懸念なしに臺灣に就いての感じを詠つて貰へば内地人にも感銘を與へる。

たしかブラジルの人の句に鸚鵡が群をなして渡るといふのがあつた。鸚鵡が渡鳥とは面白いですね。

(昭和十年十一月)

個性は自然に出る

個性といふのは自然に出る、藝の品といふものはその人の持つて生れたものである。

下品に生れついたのは仕方がない。下品なら下品で潑刺たる俳句なり文章なりを作るのがい

ゝですよ。

個性を出さうとしても出るものでない。自然に出るものだ。

(昭和十一年一月)

東洋的審美學

田岡嶺雲が東洋的審美學を起せと言つたことがあるが僕等もさう思つてましたよ。それは明治三十二年頃ですか、實際さうですね。

(昭和十一年一月)

ホトトギスに養はれたものだ

所謂新興俳句とか言つてゐるものも、もとくホトトギスに養はれたものだ。旨く養つて行

かうと思つてゐるうちに、自分で飛び出して、極端にやつてそれでいゝと思つてゐる。埒を越えたものは俳句ではなくなる。

(昭和十一年一月)

茶

「玉藻」に書きましたがね、此頃は茶も盛んになつて来たさうですね。富豪仲間に茶の會が盛んにある容子だ。太閤様のやうではないかもしれぬがいろ／＼の意味で行はれてゐるらしい。一萬圓二萬圓とかいふ茶會をやつてゐるものはさらにあるでせう。

お茶の方では、寂を知らぬ人に寂とはこんなものですよと形式的に教へる。先づ形式から這入つて行く。固定的なところがある。俳句ほど自由でないですね。

茶は昔から形式がやかましいが此頃は形式ばかりになつて了つた傾きがありはしないか。茶道といふものも源にかへらねばならぬと言つて居るものもあるが、お茶の形式といふものは餘

程破達したものらしいね。

おの道具は形ばかりを喜ぶのではない、歴史を貴ぶんでせう、誰が持つてゐたとか言つて
俳句生活とは、若しこれを茶の儀式のやうに八釜しく言へば月竝になり易い傾きがある。それが月竝にならぬやうにするには要するに人にある。人といふものは大抵月竝なんだから月竝になりやすい。形式は或る點までではなくてならぬものだが、只その人の如何によつて月竝になつたりならなかつたりする。

月竝になるならぬは人に因ることだが、餘り規則をやかましくいふと宗匠氣どりになり易い。この上澤山の規則が出来て來ることは考へものです。要するに月竝になりますよ。何事も必ず月竝になる。

大まかな形式を定めてその範囲内でやつて行くといふのが一番いい。茶道の方は形式がやかましいが、やかましい爲に持つてゐるのかもしれない。やかましくせねば潰れてゐたかもしれない。だから俳句なんかもやかましい規則を作つてさういふことにしなさいや俳人になれないとい

ふことにしたらいいかもしれぬ。どちらがいゝか分らぬが、私はあまり形式を八釜しく言つて、しやちこぼつた月並になることを恐れる。

(昭和十一年一月)

能

型を修練することを専らとするお能でも、天分はある。能役者でも初めから其人の天分で藝が違つてゐますよ。又俳句の方でも天分ばかりでは駄目、修練がなければ。

・ 笛吹に藤田大五郎といふことし徴兵適齢で入營した人がある。その人の笛は偉大なところがある、大ベシといふ笛などにそれが歴然と見える。矢張り天分ですね。

日本の家元制度、さういふものには尤なところがある、第一藝術の生理的遺傳もありますね、そして又その親の教へ方が違ひますからね、兎に角能樂などは成り上り者の出来なことです。

世襲制度は總ての方面でさういふ點に長所があつたものですね、だけれどもそれは又それで随分世間で困つたこともあつたでせう。

能樂など昔の方が教育の仕方で大ものが飛出したことは先づ間違ひないがね。又小さい時代を過ぎて次の時代に這入ると大きなものが出て來るかも知れぬと思ふです。

(昭和十一年一月)

弟子を養ふこと

偉い師匠は弟子を養ふことに勢力を費す。當代に効果を求めるよりも次の時代に効果を求める。能樂界に於ける實生九郎がまあさうですね。一人二人の弟子を鍛錬することに専ら日を費やした。そりや俳句とは違ひますがね、俳句は廣く養ふ方が却ていゝものが出來て行くことになる。それは一概には言へないが、其心掛けが肝要である。

(昭和十一年一月)

稚拙の面白味

稚拙で却つて面白いといふことがあるが、其が一足飛びに完成した人になるものは矢張りないやうですね。一べんは稚拙が取れて平凡になる、面白味といふものがなくなる、暫して段々面白味が出て来る、どうしても階段を経なきやならんですね。俳句なんかは比較的短期間にその階段を通るものがあるがお能役者とか歌舞伎役者とかは相當の年期を入れなければその域に達しないもんでせうね、繪なんかもさうでせう。

稚拙でもその人の人格が出て面白いのがあります。松平頼壽伯、あの人なんか初め仲々面白かつた。氣魄が袴をつけて舞つてゐると私が評したことがあるが、そんなやうな感じがしましたよ。黒人で多年鼓を打つてゐて一向面白くないのがある、老練であるが面白くない。それと反對に素人で稚拙であつて面白いのがある。

俳句には素人黒人はまづくはないですね。

松本長が俳句を作れば必ずしも素人らしい句許りではない。私が論をうたへば必ず素人論だ。それは俳句と論といふものゝ相違だ。

(昭和十一年一月)

俳句とことば

俳諧の發句といふものは必ず季題があるものに極つてゐる。連歌の時代からそれは鐵則になつてゐる。その發句を俳句と呼ぶやうになつたんだから俳句には必ず季題を入れなきやならぬぢやないか。

これまで繰り返して言つてゐる通り、無季のものが作りたければ、俳句でない外の詩を作ればいい。

連歌時代から一番始めの句即ち發句には必ず季があるといふことは立派な規則になつてゐる。今日俳句といふ言葉が出来たのは、發句といふものを俳句と稱へることに子規がしたので

只かういふことは言へる。溯つて發句はどこまでも發句であつて其を俳句といふのはいけな
いといふ議論が成立つといへば成立ち得る。即ち子規が發句を俳句といつたのが不賛成だとい
ふ議論は成立ち得る。そこで俳句といふ語は發句といふ語と同一とするよりも、俳諧の句とい
ふ意義とし、俳諧の雜の句即ち無季の句も亦俳句であるといふ説も成立ち得る。私は何故世人
がこゝ迄歩を進めて議論しないのかといつてもをかしく思つてをる。其代りさういふ議論になる
と、勢ひ短句即ち十四字の句も亦た俳句であるといふ説が成立つことになる。

私は十四字獨立説も以前から私かに持つてをるのである。たとへば、

丁 稚 が 荷 ふ 水 こ ぼ し け り

といふ句の如きも獨立して相當の面白味があると思つてをるのである。即ち俳句といふのを子
規の命名の意に反し、俳句といふ文字が現す廣義の意味に解し、發句はもとより俳諧の長短の
平句（發句でない句）全部を含むものとし、無季の句はもとより十四字の句も亦獨立して可な
りと思つてをる。

かね／＼思つてゐたことをつひ言つてしまつたが、併し一應はさういふことも言へはする
が、折角子規が命名したものを、俳壇の先覺者が命名したものを、漫りに變革することは憤む
べきで、そんな風に定義を變更して紛糾を來すのは愚なことである。

無季の句、竝に十四字の短句は俳句から引き離し、其々獨立さすのは異存無いが、其獨立し
た後の價值如何は又別種の問題に屬する。從來の俳諧の平句にうたつてゐる人事句の如きも、
今日では大概俳句に取り入れてうたつてをる。俳句といふものが縦横無盡に其勢力を張つて大
概なものは取り入れてをる。無季の句とか短句とか折角獨立したところで、俳句に拮抗して其
獨立性を確實にするには餘程の努力を要する。

併しながら無季の句は昔から取り除けとして誰にも多少はあるのである。發句は鐵則として
季が無ければならぬことになつてゐるが、唯取り除けとして極少數無季の句がありはする。私
も現に唯一句無季の句を句集にとゞめてをる。之は俳句に無季の句を是認したわけではない。
唯故人竝に一句保存して置いたのである。さうしてそれは無季の句も亦、俳句としてゝはない
が、獨立した或物となるべきだといふことを暗示してゐる積りである。

俳句は偶然の使命として季題といふものを荷つて来た特別の文學である。此偶然といふのは決して偶然で無く、我國が花鳥風月に富んでをる爲に起つたことで、花鳥諷詠の俳句が今日に發達して来たことは瞠目すべき文壇の偉觀である。

無季の句は理論として成立たないことはないが實際は力が薄い。無季の句を詩として成り立たすにはかりそめの努力では駄目だ。或は川柳の後塵を拜するものに終るかもしれぬ。

(昭和十一年一月)

新興俳句といふ言葉

新興俳句といふ言葉を口にするさへ厭やなんだ、新興といふ言葉は到る所にある。現にホトトギス發行所の向ひ側にも新興何々會社といふのがあつた。新聞の廣告面を見れば新興何々、新興何々、枚舉に遑なした。新興といへば人が飛びつくやうに思つて商品價値をねらつてをる。そんな月竝な言葉を州わて得意でをるのは見つともない。よしならよからう。

(昭和十一年一月)

川柳

川柳といふ人はもと俳句を作つた人である。

初代の川柳は季に關係なく人情世態を詠ふことを主としたものだ。二代目三代目とつゞいてをる。

しらべて見ると明治二年に初代川柳の選句を柳樽として出してをる。其から續いて百六十篇まで出たといふことである。

蕪村より少し後になるが殆ど同時代です。

(昭和十一年十月)

臺灣の季題

臺灣の特殊な季題だけでも大變な數になる。だから實作に伴うて季題として認めて行くことにしないと煩雜に堪へないことになるかもしれないのを恐れる。が、要するに内外に住んでをる人が機會ある毎に熱帯季題を諷詠して行くのですね。さうして實際に於て熱帯季題をだん／＼と認めて行くのですね。

(昭和十一年十二月)

ハイカイ詩人達

イギリスの美術館にゴッホの「向日葵」と「黄色の椅子」がありました。あれなんか正岡子規が描いた畫を聯想しましたね。

あの人なんか日本の影響を受けて居るといつていいですね。

洋畫に超現實を取入れたら變なものになりますね。

ピカソは試みに過ぎない、それを真似た人は氣の毒なものです。ピカソは以前から自然を研究してゐた人ださうです。

ピカソが俳句を研究して息子に勧めてゐるといふ話を聞きました、聞いただけで詳しいことは知らぬが。

西洋人に自然愛があれば俳句を判らす事も仕易いですが判らぬ人が多い。俳諧と稱へて作つて居る詩人達も自然といふ問題とは無關心だ。只十七字だけを問題にして居る。だから、その詩人達に先づ自然の興味といふものをどうかして判らせたいと思つてをる。畫には風景畫がある、だから自然の興味が判らぬ譯はない筈だが、詩人には判らぬらしい。之を誘導すれば判るやうになるかもしれぬ。

フランスのハイカイ詩人達は大きな表情をして悲しさうな顔をして季のことは判らぬと言つた。けれどもね、非常に熱心ですからね、耳を傾けるといふ氣はあるやうです。五年かゝるか

十年かゝるか知りませんが、いつかは自然の趣味も解するやうにならうと思ふ。一人でも構はぬ、二人でも構はぬ、其を解する人が出来れば、其は大變な功德だと思つてゐる。彼等は俳句といふものは日本を宗として起つたものだといふことを知つて居る、そこで、私達の言説に耳を假す傾きがある、だから説き易いといへば説き易いです。

(昭和十二年一月)

外國と俳句

外國では俳句が作りにくい。兎に角季題が少ないですね。其に花鳥の類は相當にあつても名前を知らないから。

翻つて外國人でも日本語が出来る人なら俳句を作り得ないことはないでせう。

(昭和十一年十二月)

此頃の月並宗匠の句

この頃は月並宗匠の俳句が餘程變つて來ましたよ。その宗匠といふのも私等よりは若い人々で、我等仲間の作るやうな句を見よう見真似に覺えて自然に作るといつた工合で、餘程變つて來ました。

(昭和十一年十二月)

ポーカンス氏等

パリに行つた時分にハイカイを作るジュリアン・ヴォカンス氏に招かれて一夕話をしたことがあるし、また其地に居る佐藤醇造氏がお茶の會を催してクーシニュー氏をはじめハイカイを作る人を數人よんで呉られたことがあつたのでした。何でも其時分の話に——その二度の席

上の話にクーンシュエーといふ人が三十年許り前に日本からハイカイといふ詩を持つて歸つて、それが初めとなつてバリーには一時はハイカイ詩人が續出して、今日は稍衰へて居るけれどもそれでも相當にはある。現に茲に集つて居る人は皆興味を持つて居て、私が日本から來たといふ事の爲に特に出席したのだといふ話を聞いた。私は其席上で、二三示されたものを見、又日本語に譯されて居つたものをも嘗て散見した事のある位であるが——其等に依つて俳句で最も重大なものとして居る「季」といふものが閑却されて居て、唯十七字といふ形許りが傳はつてをるといふことを知り、形よりも、もう少し重大な季といふことを全く閑却して居る事を説明して見たのであつた。一朝一夕に其等の事を説明し盡せるものでなく、歸國して後に徐々に長い年月をかけて其事を説明したならば多少は判ることはあるかも知れんと考へて歸つたのでありました。歸つた後、其等の人々に手紙を出して、其作品を送つて貰ひ、其等の批評をも試み、又こちらの俳句も翻譯して彼等の批評に俟つといつた事を遣つて行かうと考へて既に數回誌上に發表して居るやうな次第であります。

ハイカイと稱へるものは、我が日本を源流としたものであるといふ爲か、其等の人々も一介

の老書生の私の言ふことに熱心に耳を傾けて呉れる傾向もあり、又其作品をも好んでホトトギスに寄せて呉れるらしいのであります。

後藤末雄さんは既に古くから此ハイカイに就いて御研究が有つたといふ事を聞きました。

ヴォカンスのお嬢さんのことは、私が行つた時分に奥さんが一つの寫眞を見せて、これは私の娘である、最近結婚して今は主人とモロツコに行つてゐる、といつてなつかし氣に、たまたま訪ねて行つた一旅人の前で話されたことがあつた。

それからヴォカンス氏はその部屋の裝飾を顧みて日本の簡素な裝飾に慣れてゐらつしやる眼からは雜然としたやうな感じが起られるであらうけれども之はフランス流の裝飾であるから止むを得ない、といふやうなことをいつた。其裝飾の中には袖提灯が吊下げてあつたり、又浮世繪が飾つてあつたり、刀の鐔が並べてあつたり、日本のものが大分あつたやうに覺えてゐる。

クーンシュエー氏は翌日のお茶の會の時分に私たちがスーザ氏などと季のことに就て話をしてゐる時分に、何時も椅子を近く傍に寄せて、常に微笑を湛へて聞いてゐて、一言も自分では口を利かなかつた。

ヴォカンスには戦争のハイカイが澤山あるといふ話だ。

(昭和十二年三月)

ハイカイ詩人に季を教へる

私のハイカイ詩人に對する一寸した希望を述べてみたいと思ふ。

クーシュエー氏が三十年前にハイカイといふものを佛蘭西に傳へられて、主として形の十七字といふ點に重きをおいて、ハイカイといへば十七字の詩である、併し十七字といつてもこれは十七シラブルの詩として傳へられた、一番に簡潔な詩として、又五七五といふ形が特別に面白いとして傳へられた。それから短い詩であるといふことは、勢ひ象徴的になる、其象徴的にもを敘するといふことも喜ばれた。三十年來巴里でハイカイといふものが行はれ來つたのは以上のやうなものと考へるのであります。俳諧即ち俳句といふものは決して其等の形のみから來る性質ばかりで之を説明しつくすといふ事は出來ないのであつて、他に重大な「季」といふ問

題が取殘されてゐるのであります。併し其取入れられた反面の、主として形から來る問題も決して輕視することは出來ないのであつて、それが幸ひ佛蘭西の詩壇に有力なる新運動として一時盛であつたといふことは、われ／＼の目から見ても結構な事柄と考へるのであります。又取殘された半面の季、この季といふことを佛蘭西のハイカイ人は如何に見るかといふことが私の其等の人々に逢つて以來、今日に到る迄の問題として殘つて居るのであります。

季といふものは元來日本人の如く其變化が最も規則正しく最も著しい國にやつてこそ生活の上大きな影響を受けるのであつて、四季諷詠といふことも悪くいへば餘儀なくさせられたともいへるのであるが、又善くいへば天が特に惠澤を與えたところのものともいへるのであります。我國の詩人が特に此方面に千年餘りもならされて自然々々に發展して今日迄來たものと考へるのであります。が、併し其四季諷詠といふことを、佛蘭西の詩人も諒解して俳諧の半面の重大な性質としてそれを取上げて、今後は其方面に新しい道を開いて行くのも面白いことであらうと考へる次第であります。

そこで佛蘭西の詩人が此方面に手を付けるとなれば矢張り十七シラブルの形に依るべきか、

若くは他の形を取るべきか、といふ問題が残るのでありますが、日本の四季諷詠が十七字の形を要求する程、佛蘭西語は十七シラブルといふことを必要とするかどうかは疑問とする處であります。それは佛蘭西の國語の性質から判断することでありまして、私には判りませんが、十七シラブルの形でなくとも此四季を諷詠することは出来ないことはなからうかと思ひます。日本でもそれは出来ないことはないのでありまして、たま／＼十七字の俳句なるものがありました。それが最も四季諷詠に適したものであるといふところから其形が重んぜられてゐるといふわけでありまして、今少し長い詩でありまして四季を諷詠することは出来ない事はないのであつて、人にわかり易くするには其方が適してをるかもしれないのである。其と同じく佛蘭西の詩でも今少し自由な形を取つて之を諷詠することの方が或は賢明な方法ではなからうかとも考へて居るのであります。

たとへば二三號前にのせた三好達治君の「雷蝶」の詩なども、これを翻譯して見たらばと思つて友次郎に譯さして見たのでありますが、それ等をハイカイ詩人が如何に見たかといふことを聞き度いと思つて居るのであります。そんな方法を取りでもして、段々と此四季諷詠といふ

ことを彼等に馴らして行つたならば、といふ老婆心を持つて居るのであります。

もう少し季の重大性を知るやうに仕向けて行けば、何年か経つうちにはだん／＼解つて來るだらうと思ひますが、ホトトギスに外國俳句の欄を置いたのも其爲です。

(昭和十二年三月)

向ふにゐる俳人

西洋に行つたら青邨君が俳句を作つて見せるのですね。さうすると自然について來る人が出

來る。向ふにゐる日本人はどんな人でも俳句を作つてみたい考は必ずあると思ふね。青邨君がい

したら新しく俳句を作るといふつもりでやつて下さい。ベルリンには俳句會が出来た筈なんですよ。三菱支店長の渡邊壽郎といふ人は古いホトトギスの讀者です。國民俳句會に出席したこともあるさうです。この間行つた時分にもその人の家

へ招かれて俳句會がありました。又大使館の井上といふ参事官の許に饗ばれたときも俳句を一
緒に作りました。井上参事官は今度歐米局長か何かになつて歸つて來るといふ話を聞きまし
た。大倉組の支店長もやります。その大倉組の支店長は青木月斗の門人です。それからもう一
つある。日獨文化學會の主事をしてをる孫田といふ法學博士が居りまして、私が向ふへ行つた
ときにもその人が中心になつて講演會を開いたりして世話してくれました、俳句會も率先して
やつてくれた人です。

・ 巴里でも中心になる人があれば作ると思ふが。

・ ベルギーのアントワープに玉木といふ領事が居りますがね。

・ マルセーユには山下といふ領事が居ります、その人はホトトギスの讀者でないかもしれんが
私の書いたものを讀んで居るといつてゐました。その人なんか便宜を興へてくれるだらうと思
ひます。

昭和十二年三月)

松瀬青々

松瀬青々が亡くなつた。青々を一番初めに知つたのは文庫といふ雑誌がありました。俳句
の選を私がして居りました。儘か孤雲といふ名で投句して來ましたが非常に出色の句でして
ね。不思議な俳人が出て來たと思つてゐました。そのうちに青々といふ男がホトトギスに投句
して來ました。これが前の孤雲でした。その頃銀行員をしてゐたらしいがホトトギスで事務員
が一人ほしいが手傳つてみる考はないかと言つてやると直ぐ來ましてね。その時分私は三疊と
八疊の家におまして、そこを發行所にしてゐました。青々は近所に下宿して一年許り居りまし
たが、親父が出て來て自分も年を取つて心細いから歸して貰ひたいといふので歸すことになり
ました。それから大阪朝日の會計かなにかにゐましたが、そのうちに門戸を張つて「寶船」と
いふ雑誌を出し朝日を止して専門の俳人になり、朝日に居た縁故で朝日の俳句を選んで居りま
した。そして今日に及んで居りました。其時分子規が書いたことがあります。新進作家とし

て青々と数藤五城、これは一高の数学の先生、それから渡邊香墨、この男は検事をして居りました、その三人が出色で特に推奨したことがある、その一人です。

その頃私が二十六七だつたから三十一二位だつたでせうね。

古い馴染だから、無沙汰をしてをつたがそれでも何となく親しみを持つて居りました。昔は青々なんかも山會の一人だつたです。極く引込み思案みたいところがある、門戸を堅く守るといふやうな風で、門下生とは極めて密で青々門下は他へ出ないでせう、さういふ特徴があつたです。

その頃は皆紺がすりの木綿羽織を着てゐたものだね。

子規のところへ集る頃は兎に角面白かつたですね。自ら文學界の新進が集つて居るやうな氣魄でゐてね。

青々は安い下宿にゐましたが酒が好きでね、煮賣屋に行つて一本飲んで歸つて来る、いつか一べん一緒に行つたことがある、爛徳利に箸を一本入れた奴を持つて来る。それはさういふところの習はしであつた。

その時分の發行所は、猿樂町二十五番地の佐藤三吉博士の煉瓦塀にくつついてちつぽけな借家があつて其處にゐました。

その前は、神田錦町三丁目に居ました。第一號はそこで出ました。

其頃爲山、碧梧桐、四方太、悉く下宿住ひをしてゐてね。小さいながらも借家住居をしてゐたのは不折と僕位のものであつた。

はじめ雑誌を發送する時分に、それをどこへ持つて行つていゝか判らぬのでね、眞砂子の乳母車に積んで持つて行き近所のポストに入れて一杯になると次のポストに入れ、又次のポストに入れるといふ風にしたです。

するとね、郵便局から抗議が來ましてね、あんなことをされては集配人が困るといふんです。

郵便局へ持つてゆくことを知らなかつた。

胸 像

私は彫刻家と云はれる人を餘り澤山知つて居ないので、其中で石井鶴三君は以前、十年許り前に東京日々、大阪毎日新聞で「日本新八景」を募つた時分に席を同じうしたことがあつて、其時分から信頼して居つたのであります。其後一二回展覽會で作品を観たこともあり、また新聞紙上で挿繪を常に見て居りもし、それから又「東京繁昌記」といふ文章を日日新聞紙上に掲げる時分に、私の「丸の内」といふ文章の挿繪を描いてもらつたこともあるし、其藝術に對する理解も多少出來てゐる處から、胸像を作るといふ話になるのならば石井君を煩ひ度いと考へつゝ次第であります。

だん／＼に形を成して行く粘土が、石井君の手に従つていかにも柔かく自然に——其實なかなか力が入るものらしい——筋肉となり皮膚となつて行く有様を見て居ると私もなんだか石井君と共に自分の指先が共に動いて、粘土をいち／＼つてゐるやうな心持がして來て、大變興味を覺

えたのであります。尤も、とき／＼退屈をして眠りを催した場合もないこともなかつたが、併し大變興味有る仕事に出喰はしたといふ氣持がしたのであります。

それからはじめは、別に胸像の小さいのを造るといふ話がありましたが、私が考へるに、同人諸君が最初は私の像としてそれを愛藏して下さるお考が有るにしましても、年經つ中には寧ろ私の像なるが故に重荷を感じるやうになられる方々も無いことはないだらうといふ考がしまして、それよりも、寫生をして居る形のものを作つていたゞけば、其は諸君と共通な心持の有る、單なる一つの置物とも見ることが出来るし、寧ろ適當ではあるまいかと考へて、石井君に話したのであります。石井君も快諾されましてそのやうな作をわざ／＼別に造つて下さることになつたのであります。

石井君のアトリエに通つて日を重ねてゐるうちに感じた或る感じを申上げて見ますと、常にこの事は頭の中にあつたのだが、迫真といふ言葉を更に思ひ浮べたのであります。この眞は所謂寫眞の意味ではなく、石井君の所謂形に現せない、心で感じたと仰しやつた、其眞に近い眞なのであります。その眞に迫るといふ事は矢張り形の上から發足するといふことであります。

た。私達が文章なり俳句なりに寫生といふことを言つてをるのも矢張り同じ理由によるのであります。私は又法隆寺の夢殿にある行信僧都の乾漆像を思ひ出さずにはゐられませんでした。是は寫生の極致だと常に敬服してゐるのです。私には石井君の作られた像が私に似てゐるかわないかは判りませんが、若し此私の胸像が私の眞を捕へてをれば其は形の眞を捕へてをるのであり、又私の眞を捕へ得なかつたとすれば、其は形の眞を捕へ得なかつたのだと思ひます。

もとより圓山應舉の畫を繪の上乗のものとして解する意味ではありません、心の眞を寫す、といふ爲には、先づ形の眞をおろそかにすることは出来ない、といふことであります。それから胸像は矢ツ張り私の娘の居る新田の隣地の調布の庭に建てることにしたいです。此事は已に石井君には申上げてあるのですが……。等身より少し大きい像を——半身像ではあります。

置く場所が鎌倉の家には無いのです。洋館建ての應接間でもあればよいのですが、さういふものもなし、又私が死んで後は家人が厄介がることと思ひますから之は屋外に置くことにし度いと思ひます。

臺は、私の考は御影石か何かにしてはどうかと思ひます。

(昭和十三年三月)

佐 渡 の 旅

人もいふ如く書物にも書いてある通り何といつても佐渡ヶ島は順徳院の御遺跡が著しく心を惹いて、山杉にかゝつてをる藤、山路に咲きのこつてをるつゝじを見るにつけても院の御事が偲ばれておのづから胸がふさがるやうになるのであつた。殊に眞野の御陵を参拜した時は暗い木立の下に幽かな晝の御あかしが一對灯つて居て、昔は櫻と松とが御陵のしるしとして植ゑてあつたばかりであるといふ其當時を偲ぶに足る松の老樹が一本突つ立つて居るのを伏し拜んだのであつた。

バスガールの金子もとさんといふのも感じがよくつて、いつか漆人君の書いた東京遊覽自動車
の杉山千代子さんを思ひ出した。その説明を聞きながらバスに乗り島めぐりをするのは愉

快であつた。

名畑清次といふ老人が、この島の案内に立つて下すつたといふ事は萬事に非常な便宜を得て、一行の大に仕合せに感じたことであつた。この老人はこの島の名望家で嘗てみづほ國手に脱疽の治療を受けて片方の足を切らずに済んで、そのことを大變徳として居られ、今度もすんで東道に立たれたものであるさうな。義足に靴を履いてそれでバスを下りてから御陵までの道を歩く時なども相當に元氣であるのを見受けた。

國分寺趾のもの靜かなひろくとした松原は大變いゝ感じでありました。鶯の聲が大きく、うらゝかに響き渡つてをるのもいゝ感じでした。國寶藥師如來を收めた瑠璃堂といふ建物もよろこばいしました。

諸君が歸つて來て小句會を開いて九時半になつてから名畑老人に案内されて宿を出てすぐのすし嘉といふ所に出かけ、土地の人々が組織してゐる立浪會といふのゝ相川音頭と佐渡おけさといふのを見た。上方でいふ節季候笠をかぶり踊る姿は美しかつた。そのすし嘉の門内の處に石臼のやうなものが澤山置いてあるのを見て、厭な好みだなと考へながら宿に歸つたのであつ

たが、一夜明けてから名畑老人の話に、之は皆昔こゝの金山の金鑛をひいた臼であつて、石垣などにも澤山してあるし現にこの宿の庭にも飛石などに使つてあるのであるが、近頃はこの臼を好んで買う人があつて、土地に埋れてをるものなどを態々掘り出して相當の値段で賣るといふ話などをした。始めてその臼が金をひく臼であることが分つて、昨夜の謎が解けたばかりでなく厭な好みの置石であると思つたことも一時に消えてしまつて、佐渡に來てはじめて佐渡らしい情趣のあるものにぶつかつたやうな感じがして、暫く障子をあけて庭の踏石になつてをるその石臼を眺めたのである。

(昭和十三年六月)

連句も季題の文藝

芭蕉が出て居る席では芭蕉が絶對の權威者であつたやうです。

諸君が澤山寄せられる句の中から私が選んでゐるのですが、一句々は面白いものがありま

しても句柄が單調で……、今の人の俳句的になつて……。

昔は大概席上で一日で卷いたものと見える。

連句が遊戯だといふことは子規がいひ出したのです。其當時遊戯ぢやない、といったのは私だけでした。鳴雪も碧梧桐も子規の説に賛成でした。

漱石、四方太などは連句も亦よからう位の意見であつて、自分達でも試みて見ましたが、いづれも文章の方が熱心で、私も亦文章の方により多く興味があつた爲め續けて連句を研究する餘日がなかつたのです。此頃年尾等が猿蓑輪講をやつてをるから其仲間で試みに遣つてみてはと云つた、幸ひ諸君が熱心に遣るので結構なことだと思つてゐます。

連句をやつて居ると小説的天分の有る人は小説を書きたくなるかも知れません。芭蕉の附句を見ると立派な小説の構想が覗へますからね。

近來の俳句は附句で試みたやうな人事をも縦横に詠じてをる。も一つ連句と季といふ問題ですが、連句も全體として矢張り季に重きを置いてゐる、季の有るものと無いものが縋ひませにありますが、全體を見て季題の文藝であると言ひ得ると思ふ。

連句全體を見るに矢張り季感が強い。始めの句、即ち發句にも季があれば中にも季のものが幅を利かし、終末の句は春に限られてをる、其中にはさまれた無季の句も前後の季の句に助けられて存在してをるのである。

蕪村の「桃李」などの一句々々を見ますと、天明時代獨得の華麗な句が續出して素ばらしいものですが全體に感銘が薄いのは變化の點と人事描寫が至らなかつたですね。

連句も力めればまた新しい好いものが出來ると思ひます。天明あたりでも連句に費した力は俳句よりも大分少なかつたのではないかと思ひます。どうも天明の連句は元祿のものに比べものにならん。併し力めれば相當のところまで行つたかもしれん。今日でも今までは誰も願ひなかつたのである。今後力めれば敢て元祿に劣らぬものが出來ると考へる。

芭蕉も必ずしも規則通りには遣つて居らんやうです、規則の精神さへ捉へてをれば比較的自由にやつてよいものと思ひます。

さうですね。まあ子規の「俳諧大要」の中に出てゐる連句の心得位のものを読んで、實際作りはじめて見るのですね。

年をとつてゐる人、經歷の多い人には附句の變化が多いでせう。
はじめから規則を覚えるのは面倒でせう。それよりも遣つて居るうちに次第に判つて来るも
のです。

(昭和十四年三月)

俳諧詩

俳諧詩ですか……。

まだ本當に斯ういふものが俳諧詩だと極つたわけではないのですが、俳人が作る詩だから俳
諧詩といつてよからうかと考へます。

私の主義としてドシ／＼作つて見る、それがはじめで、主義はあとから出来るものだと思ひ
ます。

(昭和十四年三月)

寫生文

鈴木三重吉君のは寫生文とは行き方が違つてゐる、けれどもよく寫生文を理解してゐた。そ
して私になぜもつと寫生文の功德を吹聴しないかと言つてゐた。

まあ事件を取捨按排しながら忠實に寫生するといふのが寫生文の出發點でせう。それが進ん
で来て今日ではその事件を寫生する中に作者の情緒が自然に裏附けられるといふ傾きになつて
來たと思ふ。丁度俳句の寫生句といふものは、景色を寫生するといふ事に出發してゐるけれど
も、併し究極するところは作者の感情が深く裡にひそんでゐるものでなければいけないといふ
のと同じやうなものである。作者の感情が深く裡にひそんでゐて、事件なり人情なりが忠實に
寫生された文章といふものは、それはたゞ簡單に事實を寫生した文章の如く見えてゐても、そ
の實、作者の深い感じを敍べたものといふ事になる。詰り感情を生まのまゝに現さないで事件
を透して現すといふことになると思ふのであります。だから寫生文といふものは事件を假そめ

に取扱はない、忠實に大事に取扱ふ、其點に技巧を練る、其事件の描寫によつて作者の感情を讀者に運ぶといふ文章だと考へるのであります。寫生の忠實にしてない文章は寫生文でないと思ひます。忠實といふのは唯精しく寫すといふのではなくて、其感情を運ぶのに必要なものを寫す、省略をうまくする、即ち洗練された技巧が缺く可からざるものであると考へるのであります。

さうで無いものもあるでせうが、先づ概していへば、事件を作り上げるといふのが小説であり、事實を寫すといふのが寫生文であると思ひます。

昔の寫生文といふのは兎もすると作者の感情の側が閑却されて、唯事實を寫すといふことのみ重きが置かれた。感情が土臺になつてゐる寫生文といふのを俳文といつて見たまでである。つまり進んだ寫生文といふことになるのであります。俳文といつたのは俳人の書く文章だからであります。

よくわれ／＼が句を作りに出かけたりする時に、寫生に行かうと云つてゐた。それと同じく文章を作りて淺草とか何とか人込みの中などに掛けた。同じく文章を寫生に行くと云つてゐ

た。それ等から自然寫生文とよぶやうになつた。

山田美妙齋といふのが居て、それが始めて言文一致を稱へたですね。併し美妙齋の文章は極めて粉飾が多かつた。當時二葉亭四迷がロシア文學を譯して居つたが、それも言文一致でやつた。此の二葉亭の文章も今日の口語體とは違ふが、併し美妙齋のものより口語體にむしろ近かつた。その時分に寫生文が興り、口語體で書かなければならないと言ひ出して實行した。静岡の師範學校の教生が三四人で、ホトトギスの文體は面白いと云つて生徒に書かせたといふ事その教生から報せて來た、この教生の一人は今日の六十翁關萍雨君であります。そんなことで燎原の火の如く一度に全國的に擴がつて行つたのでした。今日では殆ど口語體でなければならなくなつてしまつた。

「淺草寺のくさく」などが寫生文のはじまりだが、あれはまだ文語體でした。

森鷗外はホトトギスを讀んでゐた。鷗外が「有樂門といふ文章を帝國文學？に書いたが君讀んでくれたか」といふので、「いやまだ讀みませぬ」と云つたらば、それは君達の寫生文を眞似て書いたんだと云つた。鷗外の文章ははじめは文語體のものでしたが、半頃から口語體の

ものになつたかと思ふ。

寫生文といふものは、文章を書く役に立つたといふことは世間の文士達からよく聞く話である。

寫生文に刺戟の強いものが無い傾がある。それを書かうとすると寫生でなくなることになるからだ。刺戟は弱くとも本當のもの、藝術的のものを書かうとするからだ。源氏物語なんかも刺戟は餘り強い方とも思はないが、あれは寫生だ。

一體寫生文的なものは刺戟が強くない、けれども藝術的で上品だ。私達でも刺戟の強いものを欲しないことは無いのである。併し刺戟の強いものは寫生する機會が少なく、又寫生がむづかしい。刺戟が強くつて藝術的なものがあれば結構だが、大概刺戟の強いといふものは、拵へものであつて、まざり物が多い。だから藝術的で、上品な、寫生的なものを欲求する。たとひ刺戟が少くとも其で満足してをる。が、だん／＼進んで行つて刺戟の大きい藝術的なものを作り度いと思つてをる。寫生文的のものであつて大作が望ましいと思つてをる。

俳句なんかも近頃の若い人は刺戟の強いのを欲する。欲する餘り生ま／＼しい未完成な主観

の露骨に出た非藝術的なものを歓迎し、文章の方でも、猥雑物の多い主観の露骨に出たものを喜ぶ。だから刺戟々々と志しては本當の藝術的なものは書けない。刺戟は少くとも寫生的なもの志すのが私等仲間の本意である。唯だ寫生を錬磨して徐々として強く深きに至り度いと思つてをる。能などは刺戟は強い方ではないが、數百年経つてゐてもいつも新しい上品な藝術である。

鷗外が能の「弱法師」を見て泣いたといふことが、若し本當なら、それなんかは儘かに藝術的な刺戟からでせう。又ぐつと大きな藝術だと刺戟も強く一般にもよく分つて來るでせう。矢張り寫生文でも大きな立派な寫生文を書けば刺戟が強く、一般にも判るやうになるのだ、寫生文が物足りないといふのは寫生文が悪いのではなく、書く人が非力で根氣が無いからだ。

その本當に秀でた大藝術は誰にも分るのでせうな。窮極は誰でも其大藝術に達しようとしてゐるでせうが、唯人々が進んで行く道が違ふのでせうね。一つは始めから大衆に判るやうに行き、それがだん／＼藝術的にならうとするし、一つは大衆には分らなくてもよい、先づ藝術的と志して、それからだん／＼大藝術に進んで行かうといふわけでせうね。

(昭和十四年三月)

「新歳時記」

従来の歳時記は科學的に解説する傾きがあつた、私はそれに反對で先づ文藝的のものとした。それから今迄の歳時記は季題の多きを求め、それを誇りとする傾きがあつた。私は季題を選択することに重きを置いた。多きを貪るよりも、いゝ題を選むといふこと、只集めるよりもよき題を並べること、重きを置いた。此事は獨り歳時記に限りませんよ、句集を編むにしても澤山句を集めることは誰にでも出来る、俳句を知らないものにも出来る、唯選擇が六ヶ敷いのだ。いゝ句を集めるといふことがむづかしいのだ。句集を編む極意はそこにある。其句集を編むのと同じ意味で季題の選擇といふことに重きを置いた。

むしろ棄てることに骨を折りました。

今度の校訂には熱帯季題を多少入れようかと思つてをる。其に外に「季寄せ」を作ること

なつてをる。

熱帯のものに地名は入れません。火焰樹とか鳳凰樹とか赤道祭の類は入れてもよからうと思ふのです。

(昭和十四年三月)

句帳

素十君が私の句帳を一冊だけくれといふのですが、あんな見苦しいものを差上げることは出来ません。

大分古いことだが、私は日記帳を屑籠に投じたことがある。それが屑屋の手に渡つて、廻り廻つて或る知らぬ人が所持してゐて、其人が私の處へ持つて来て御入用ならばお譲りしてもいいといふのです。其人がいふのにはこんな汚いあなたの日記帳があるといふことは、これが人手に渡つたら見苦しいでせう、いくらかを買つてくださいといひました。厭な氣持がした。「已

にあなたの手に渡つたものなら仕方が無いからまああなたが持つておいでになるがよからう」と云つて突つ返しました。そんな風に又此の私の汚ない句帳の亡き骸がどんなことで人手に渡らうとも限らないから、古いものは焼棄してよめる方がよからうと思つてゐるのですが、併し焼棄してもせずにおるから、又さきの日記帳のやうに人手に渡つて耻をさらすことになるかも知れぬ。又誰が見ても判りつこは無い汚ないもので、鉛筆で亂暴に書いてあつてなか／＼讀めはしません。あんなものを持つてをづつても仕様がありませんよ。

鉛筆でグチャ／＼書いてあるので句日記に載せる句は東子房に清書を頼む時分に其句だけをペンでなぞるのです。

句は句日記にするときに直ほすことがありますね。

直ほすのは其時はよくなると思ふのだが、悪くなる場合もあるでせう。句日記に載せる時は丁度一年経つてをるのだが、一年経つて見ると、なんだこんなつまらん句を作つたものだと思ふやうなのが多い。

(昭和十四年三月)

秘 傳

いゝ藝術品のべつに出来るものではありませんまい。いゝものはたま／＼出来るのである、つまり天から授かるのである、と私はさう思つてをる。私は殆ど毎日のやうに俳句を作つてをりますから諸君よりは多く作つて居る、それでいゝ句といふものはたまにしか出来ない。

句を作るにはほんたうに氣分が澄んで、心持がちつと丹田に落著いた時がいゝんですね。僕に一つの秘傳がある。其は滅多に公開するべきものではないが、……其は心を落著けるのには欠伸をつゞけさまにするといゝ。

アーアーと大きな欠びをすると其度に心が落著いて来る。

一子相傳といふやつがあるな、まあそんな秘傳ですよ。

なんだ、花鳥諷詠の極意は欠伸か、といふことになるですね。

(昭和十四年三月)

上ノ畑 楠窓

上ノ畑楠窓君が肺炎で急に亡くなりました。楠窓君のことを考へれば一番にフランスに行つた時のことを考へる。私がフランスに出掛けたのは素十君が一番に勧め、楠窓君が慫慂したことが原因です。楠窓君はよくつとめて呉れました。船中でも萬事便宜を圖つてくれまして、殊に食事なんかしよつちう三等の方の和食を取つて呉れました。一等の洋食と共にちやんとテーブルに並べてありました。も一つは風呂です。私は非常に皮膚が弱いので鹹湯に這入るとかぶれるのです。淡水の風呂でなくては這入れないといふことをかね／＼云つて置いたものだから、楠窓君が心配して特別の風呂を作つてくれました。印度洋の航海が長く續いて丁度コロソポを出てアデンに行く前だつたと思ひます、ボーイがやつて來まして、今までは淡水の風呂を立ててゐましたが水が不自由になつて來ましたから、かゝり湯だけで我慢してくれと云ふのでした。其後様子を聞いて見ますと今迄楠窓君が自分は風呂に這入らないでその分を私にくれて

ゐたわけでした。大いに恐縮しましたよ。

それから毎日のやうに朝食をすますと正午頃まで楠窓君の部屋に出掛けて文章を筆記して貰ひました。午飯がすんで二時か三時頃まではぐす／＼してゐて、暑い印度洋などでは甲板に出て籐椅子に人並に晝寝をすることもありませんが、又晩食前一二時間はその部屋へ出かけて筆記を遣つて貰つたのです。兎に角に船中で普通の人が退屈する時間は楠窓君のところへ行つて筆記をして貰つたのです。楠窓君の筆記を見ると随分危しげな字を書いてゐる時もありましたが、それは楠窓君の睡い時であつたのです。マルセーユに上つてから暫く別れてをりましたが、ベルギーに出掛けて、アントワープに箱根丸が着いてゐるのを訪ねて行きまして、二日楠窓君と一緒にをりまして、それから私達はドイツの方へ行き、オランダからイギリスに渡つて又箱根丸に行つて楠窓君に逢ひました。それから私はパリに歸つて又マルセーユから箱根丸に乗つて歸りも亦行きと同じ様に、時間のあまりがあれば、楠窓君の部屋に行つて筆記をしてもらつたものでした。

素十君の顔を見ると武藏野探勝會の時、多摩川の田さんの家に行つて居た時、洋行の話が持

ち上つて、それちや行くことに極めようとかりそめに極めて、七八人と一緒に水竹居さんの家に會合したことを思ひ出します。行くことにしよう、家族にも相談せず極めてしまつたのでした。

逸話といふ程でなくつても、眞面目な人であつたから、なんだかをかしく感ぜられたきいふことは色々あつたやうです。

私がブラックボードのことを書いたものだから、其後ブラックボードの剝製を英國で作らして持つて歸つたのは破損しまして、今度又新たに持つて歸つて呉れたのがあれです。最近は隅田川にゐる都鳥のことを書いたものを持つて來ましてね、参考になればと云ふのでくれました。

230

船の中では機關長はひまなものです。一等機關士が萬事を遣るのですね。一等機關士が持つて來るものに判を押すくらゐで一日閑です。楠窓君は、私が一緒に行つた爲に珍しく甲板に出たらしいですね。ふだんはちつとも甲板などに出たことがない人が今度は珍らしく出てゐると船員が云つてゐました。食事の時食堂に行く外はいつも自分の部屋に引込んだきりだつた。

さうです。まして麻雀や碁將棋などやることはちつともなかつた。この都鳥のやうなものを調べること船中の仕事の一つであつたらしいです。

(昭和十四年五月)

連句は人生を寫す

連句も當然俳句と共に發達すべきものでしたが、子規が連句は文學でないといふので顧みられなかつたので……。

231

一貫した意味が無いといふこと、一人の作で無いといふ事等からでしたらう。併し連句でなければいへないものがありますからね。遅延しながら遣つて行けば元祿頃と違つた今日の連句が又出來て來るだらうと思ふのです。若い者が熱心ですから指導して行けば何物かを得られると思ふのです。

勿論遣つてはゐます。其連句を少し許り見たのですが、芭蕉のやうに變化がない、一句々々

は相當に面白いのですが。連歌といふものがありませう、今日でもまだ續いてゐるかしら。連歌とか俳諧とかは日本特有のもので、西洋文學には類似のものが無い。西洋文學にないといふので非文學だといふのは少しをかしいと思ふ。日本に出來たもので、日本の文學として却つて尊重すべきものではないでせうか。

戀、神祇、釋教、無情、羈旅、哀別、さういふことに連句は重きを置いてゐます。其等のものは人生の波瀾である。連句は人生を詠ふといふコツを心得てゐて、其等のものを按排して一巻を組立て、行つてゐるのです。

芭蕉は戀句が得意だつたといはれてゐますね。

私は子規の連句非文學論に反對しました。が、其時分の鳴雪、碧梧桐はじめ多くの人は又僕の説に反對しました。漱石とか四方太とかは反對もしませんでした。一緒に作つたこともありませんが、文章の方に熱心で餘り此方に重きは置きませんでした。

連句の規則は、とに角作るのですね、説明だけすると却て解りにくいものでしてね。

先づ猿蓑の連句を見るといゝですね。

(昭和十四年四月)

吟行と季題

吟行した場合には先づ季題を見付け出すことが一番肝要なことであつて、また六ヶ敷い事だと思ひます。其時の自分の感じと一番びつたり合ふ季題を見出すといふ事が最も必要なことでもあります。いつたん其季題が見付かつて、其が自分の感じとびつたり合つた場合は、句はたやすくするすると生れて來るともいへるのであります。

(昭和十四年六月)

秋田地方

秋田地方は石井露月の死んだ後も、その孤城を守る人々で固められてゐると聞いてをります

が、露月の遺徳を慕つて自ら團結を堅くして他派との交渉は餘らないといふことも一つの美德であつて結構なことだと思つてをります。

(昭和十四年八月)

連句の研究は私の生涯に残された重荷の一つ

猿蓑の俳句にせよ歌仙にせよ選りに選つたものと思ひますね。

凡兆の氣質、生涯はどんなものであつたのですかね。晩年は芭蕉に叛いて月竝の句を作つたとか、獄に下つたとか言ひますが。

私達は連句は作らず俳句のみを作つて来たものですから、勢ひ俳句の中に連句の領分が遣入つて來まして、昔は連句でなければ言はないことを此頃は俳句でどしどしいふやうになつて來ました。尤も俳句は季題といふ羈束がありますから、連句の無季の句で縦横に世態人情を描くといふ風には尙ほ行き兼ねるところがあります。

私は連句も亦た特異な文學だとして、之を推稱する文章を書きましたが、それは子規歿後間もないこととして、其頃は連句を此儘に埋没させてしまふのは残念なことだといふ考があつたのでした。ところが今から考へると生憎なことに、一方に寫生文といふものがあり、それも其まゝにほうつては置かれず、其方にも力を盡し、勢ひ小説にも筆を染めて見ることになつたので、連句の方は連句論を書いたり、古人の連句を味つた許りで、實作は其に伴はず、遂に其まゝになつてしまつたのでした。爾來今日まで俳句許りで来たものですから、前にいふやうに、従來連句でなければ言はなかつたやうなことをもだん／＼と俳句でもいふやうになつて參りました。だが、俳句はどこ迄も花鳥を根幹としますから、俳句だけでは十分なこととは出来ませんでした。連句は世態人情を寫し、人間の生活に即します。今の若い人々の要求するところは之を俳句にもとめずして連句にもとめるべきだと考へます。従來の行きがかりもありますし、連句の研究は私の生涯に残された重荷の一つであります。

連句の規則や其變化工合といふものは自然に起つて來た要求だと思ふ。先づ連句は一句一句が面白くなくてはいかん。次に前後の句が作る天地が美しくなくてはいかん。さういふ天地が

ひつきりなしに起つて来るのであるが、其天地に變化がなくては飽いて来る。だから芭蕉なん
かの作つた連句を見ると變化が面白い。蕪村の連句は

酒一斗牡丹の園にそゝぎけり 楞 良
日は赫突とよき墨を磨る 几 董
あすは早普陀落山を立出でん 蕪 村
豆腐に飽きて食ふものもなく 楞 良

といふやうに二句づゝの盡く天地は非常に美しいものがあるが、全體の變化が乏しい。之が芭
蕉の連句に及ばないところだ。連句の神祇釋教戀無常といふ類は世態人情を寫す自然の要求に
基くものである。芭蕉の連句といふのはたとへば次の如きものである。

追たてゝ早き御馬の刀持 去 來
てつちか荷ふ水こほしたり 凡 兆
戸障子もむしろかこひの賣屋敷 芭 蕉
てんしやうまもりいつか色つく 來 蕉

こそくと草鞋をつくる月夜さし 兆 蕉
蚤をふるひに起し初秋 來 蕉
そのまゝにころひ落たる升落 來 蕉
ゆかみて蓋のあはぬ半櫃 兆 蕉
草菴に暫く居ては打やふり 來 蕉
いのち嬉しき撰集のさた 來 蕉
うさまくに品かはりたる戀をして 兆 蕉
浮世の果は皆小町なり 來 蕉
なに故に粥すゝるにも涙くみ 來 蕉
御留主となれば廣き板敷 兆 蕉
手のひらに風遣はする花のかけ 來 蕉
かすみうこかぬ晝のねむたさ 來 蕉

新しいものを作らねばならぬことは十分承知してゐますが、一度古人の遣つたことを知つて

からでない」と新しいことは出来ません。古人の業績を一應習熟した上で自然々々に生れ来る新しみを賞ばねばならぬと思ひます。連句でも俳句でも、又何にしても、はじめから古人の努力を輕蔑して、自分の手で新しいことを遣らうといふ、そんな輕薄な考は禁物だと思ひます。兎角若い人にはさういふ覇氣がありますが、それは大概失敗します。本當の新しいといふことは古いことを充分知つた上で無ければいへないことだと思ひます。

昭和の連句が出来ねば駄目ですね。

作つてゐれば自然々々に新しいものが出来て来る。習練を缺いで唯新しいものを出したい出したいとあせつた處で、其は生ま／＼しいものになつてしまふ。練習して居る中にだん／＼底光りがして来て、古人に無かつたものが生れて來ます。

連句は俳句とは違つて、縦横に世態人情を詠ふものです。併しその世態人情を詠ふ前後には季の句がはさまつて、自然に季の句ひが其無季の句にも及んで行くのです。連句の第一句（發句即ち俳句）には季があり、結末の句にも季があり、又中にも季の句が澤山ある。さうして自由な世態人情を詠ふ無季の句を暖かに抱擁してゐるのです。だから連句の中では無季の句が最

も活躍して世態人情を描くのですが、其に拘らず連句全體を見渡して見ると、矢張り季の句ひが強く、連句も亦花鳥諷詠の文學なりと言はねばならぬと思ふのです。前にも言つたやうに今日の俳句は餘程連句の領分に食ひ込んでゐる。これは連句といふものを作らず唯俳句のみを作つてをつた爲めに勢さうなつて來たのでありますが、連句を作るやうになつたならば、もつと自由に世態人情が詠へることを見出すであります。それといふのは、季の句ひはありながらも、季に束縛されずに、世態人情を諷詠することが出来るからであります。

花鳥と人事を織り交せて綾織のやうに一卷を爲すところが連句の面目であります。一句一句形作る天地が繪巻物の如く順次展開して行つて、變化があり波瀾があり、其が歌仙となり百韻となつて、又寶塔のやうなものを形作るのであります。

それは其連句を作る集團の人の力と其をリードする人の力とに依つて構成されて行くものです。

もと／＼連歌時代に大體の規則は定まつてゐました。其を踏襲して俳諧の連歌となつたのです。内容は餘程變つて來たが、形式は連歌の規則を多分に踏襲してゐます。其等のところに、

古人の輕薄でない重厚なところがあると思ひます。

變化の上からはいろんな人の集りが必要なのであります。古來から獨吟のものにいゝものはありません。連句は少くとも兩吟といつて二人で作るか、或は三吟といつて三人で作るか、もしくはより以上の人の力の集團を必要とします。さうして其をリードして行く人の技倆によつて大變な違ひが生じて來ます。

(昭和十五年一月)

著者 高濱虛子先生

今年芽出度い古稀をお迎へになつた。

ホトトギス發行所經營。

帝國藝術院會員。

日本文學報國會俳句部會長。

昭和十八年七月二十六日

中央出版協會

昭和十八年九月二日初版印刷
昭和十八年九月十日初版發行(四〇〇〇部)

俳談

定價二圓二十錢
特別行爲
稅相當額 八錢
合計二圓二十八錢

著者

高濱 虛子
東京都麴町區一番町四番地ノ二

發行者

下山 儀三郎
東京都京橋區木挽町二ノ九

印刷者

佐藤 印刷所
東京都神田區淡路町二ノ九

配給元

日本出版配給株式會社
東京都麴町區大手町二ノ二

發行所

中央出版協會
電話丸ノ内八一七番
振替東京一四八番
會員番號 一一七五〇三

出版會承認
イ 180599號



979
79

終

中央出版協會刊